

平成 20 年度地球環境基金助成事業



混獲問題出前授業 Part III

まもりたい地球、 つなぎたい未来

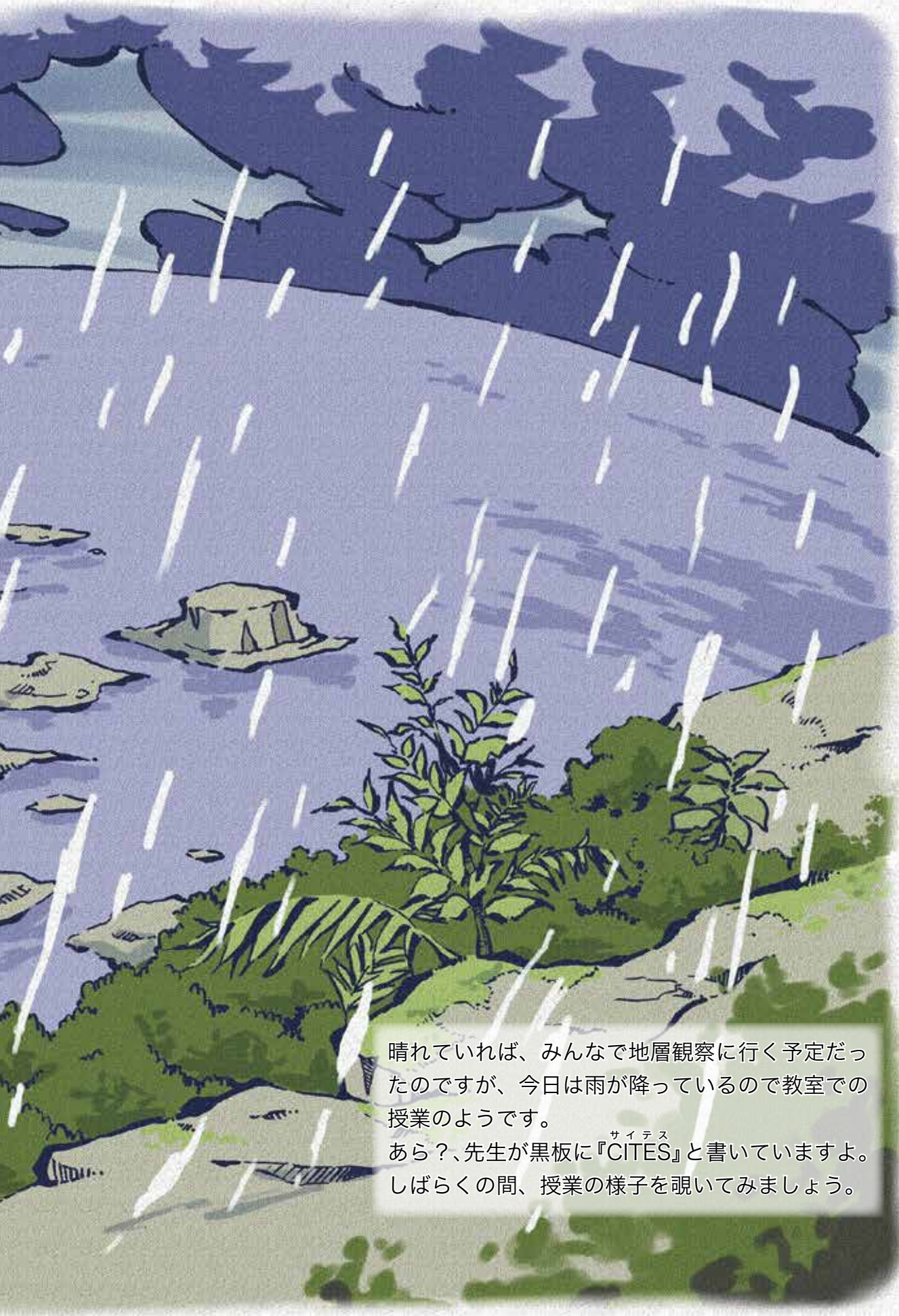
企画・文 北村 徹
絵 林 亮吾



(社)自然資源保全協会



海の近くにある小さな小学校には、今日も元気な子ども達が集まってきました。まだ眠そうな顔をした子どもいますが、六年生の教室では一時間目の授業が始まったようです。今日の一時間目の授業は、外に出て魚や植物を観察したり、それから化石を探したり・・・、生き物や自然の勉強をする『地球の時間』です。

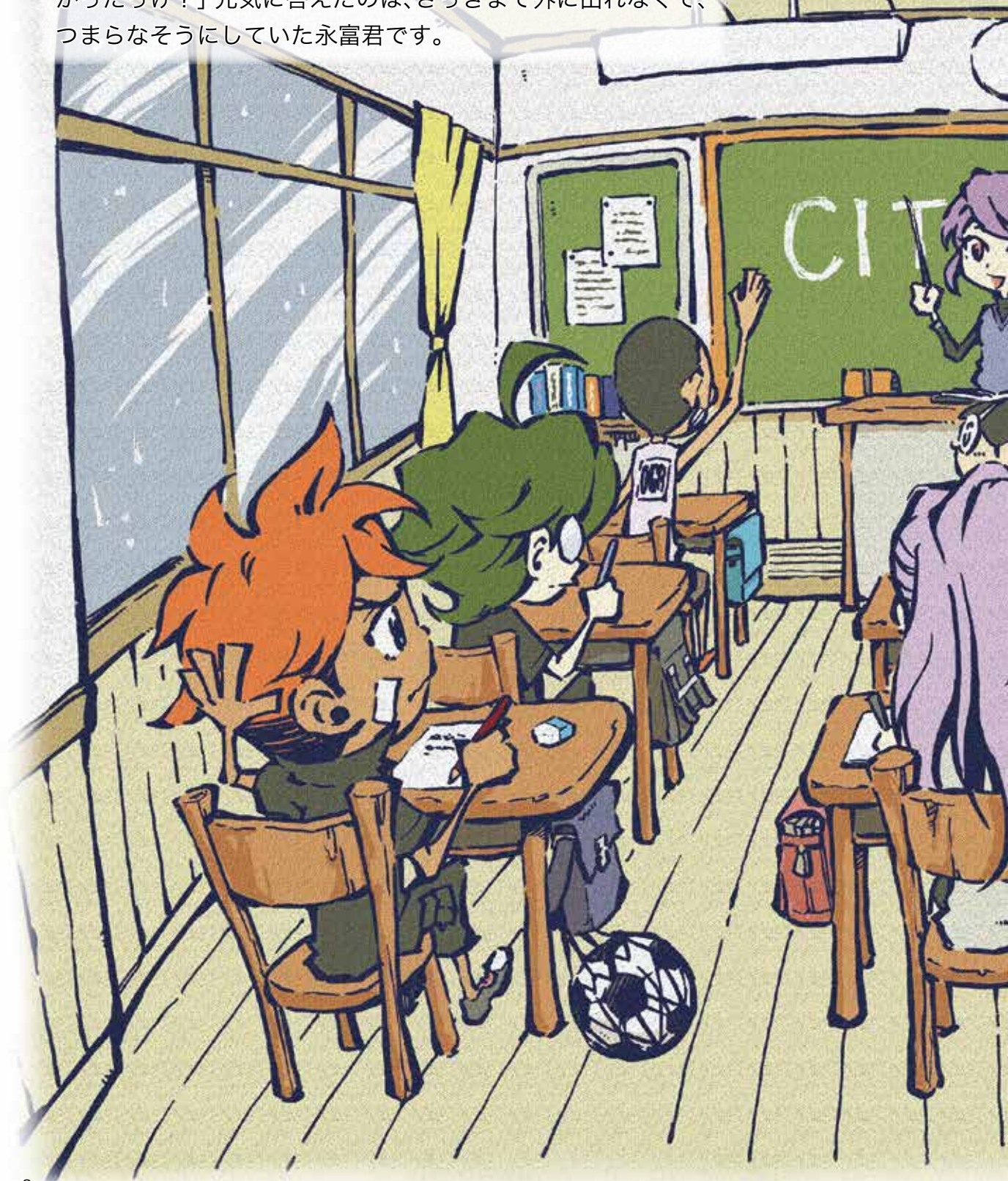


晴れていれば、みんなで地層観察に行く予定だったのですが、今日は雨が降っているので教室での授業のようです。

あら？、先生が黒板に『CITES』と書いていますよ。
サイテス
しばらくの間、授業の様子を覗いてみましょう。

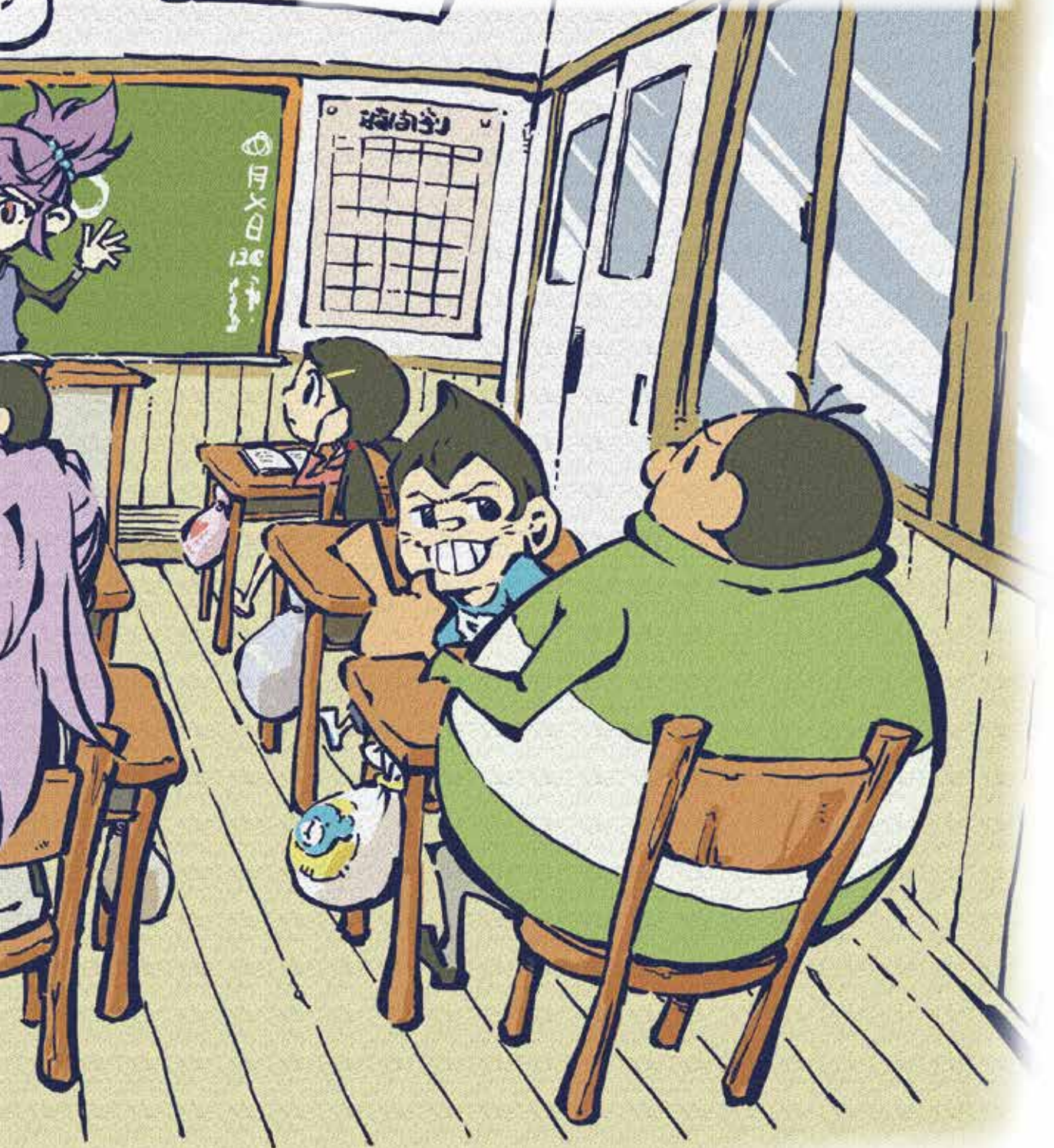
「みんな静かにしなさい、授業を始めますよー。さて、みんなはCITES、つまりワシントン条約という言葉を知った事があるかな？」

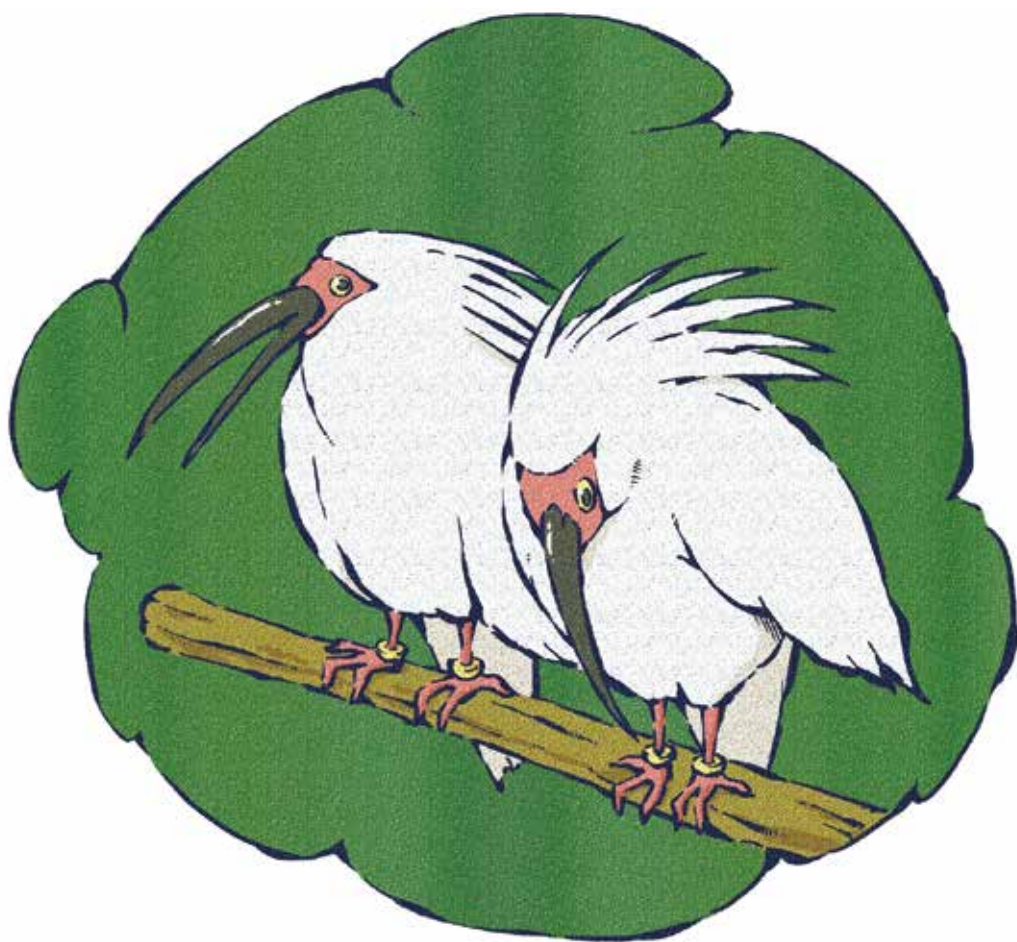
「知ってる！たしか、数が少なくなった動物を守る法律じゃなかったっけ？」元気に答えたのは、さっきまで外に出れなくて、つまらなそうにしていた永富君です。



「うーん、だいたい合ってるかなあ……。今日は、ワシントン条約の話をするわね。この条約は外国への輸出や、外国からの輸入を管理しながら、生物を絶滅の危機から救うために決められた国際条約です。」

「恐竜が絶滅したのは有名だけど、動物や鳥でも絶滅した生き物がいたのかしら？」理科が得意な竹本さんが質問しました。





「日本ではトキという鳥が絶滅したわ。1995年の4月に最後のオスが、そして2003年10月には最後のメスが死んでしまいました。オスにはミドリ、メスにはキンという名前がついていたのよ。それから、日本には住んでいなかったけれど、寒い地方の海で生活していたステラーカイギュウは、1768年前後に絶滅したと言われてます。ジュゴンやマナティーの仲間だけど、体長は7メートル以上、体重は10トンを超えるぐらい大きかったのよ。」

「ふーん、そんなに大きな生き物も絶滅したんだ……。なんだか怖い感じがするわね。」濱田さんが心配そうな声で言いました。

「心配する気持ちは大切ね。でも、山には山の世界、海には海の世界、つまり山や海の生態系の中で、生物はバランスを取りながら共存しているから、普通なら急に絶滅する事はないのよ。」

「生き物達のバランスを調整しているなんて、自然の生態系って、すごいや！」土井君が目を輝かせながら言いました。

「でも、人間が生態系のバランスを崩したために数が減ってきている生き物もいるし、少なくなって保護する必要がある種類も少なくないのよ。」

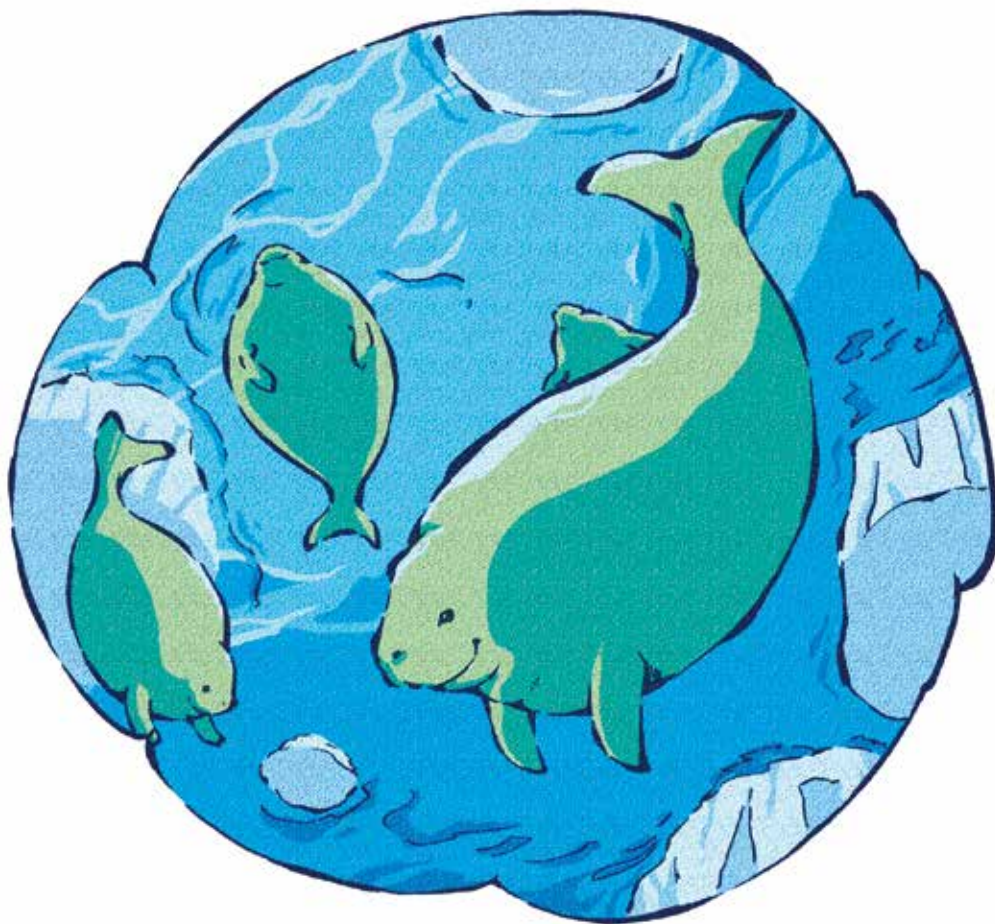
「でも、人間は肉も魚も食べなきゃ生きていけないしなあ・・・、自然界のバランスを崩さないで生きていくのは難しいよなあ・・・。」怒ったような顔をして奥田君がつぶやきました。

「突然だけど、みんなはマグロの刺身は好きかな？」

「もちろん、大好き！」たくさんの生徒達が元気に答えました。

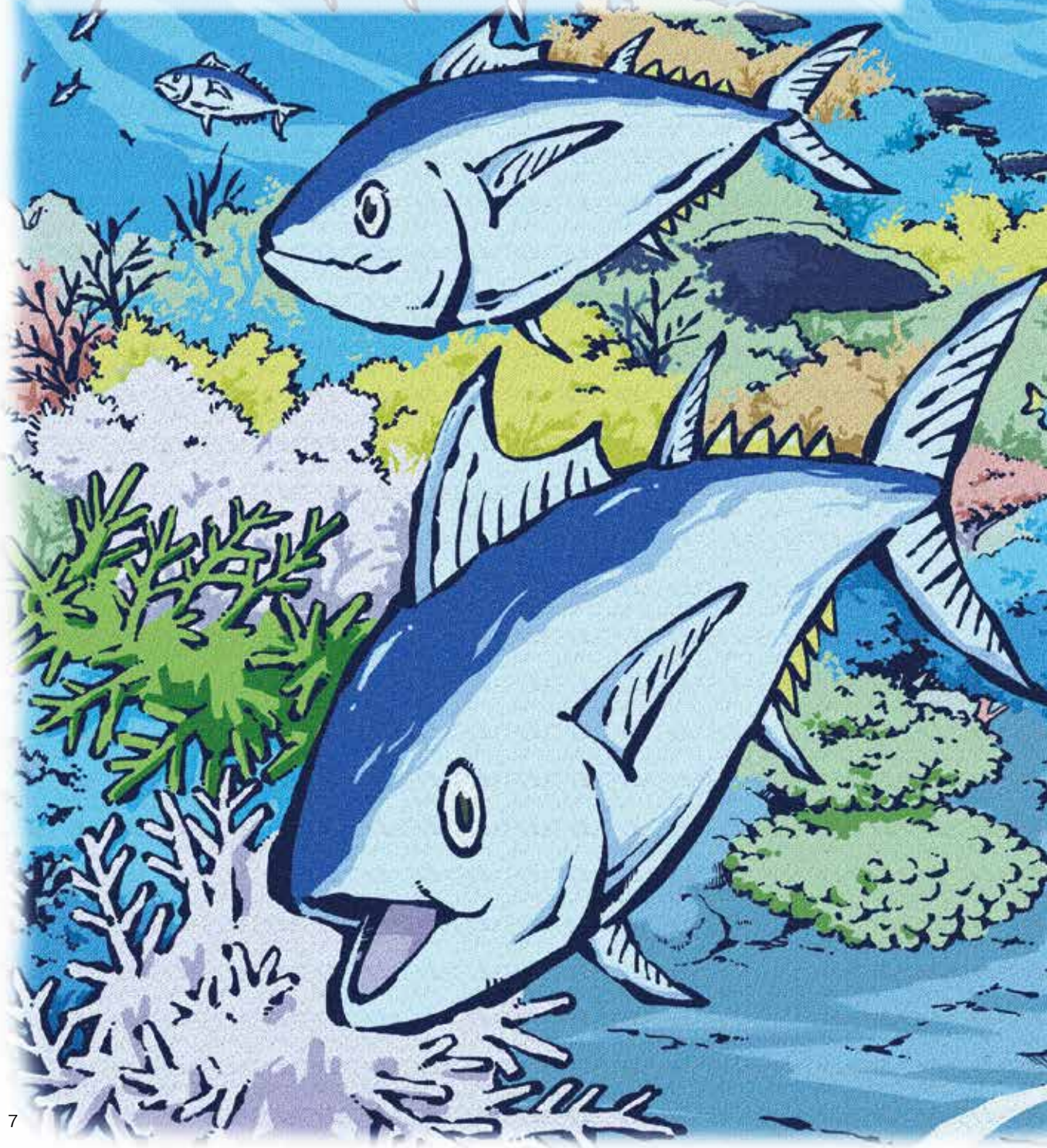
「そういえば、マグロを獲る量を減らそうっていう話を、テレビのニュースで見た気がするわ・・・」竹本さんが少し不安そうに言いました。「マグロが美味しいからといって、世界中の漁師さんが自分勝手に獲りだしたらマグロも少なくなるでしょ。だから、マグロの研究者が集まって、マグロの数が減らないようにするにはどうしたらいいか相談しているのよ。」

「なんだか、さっきの自然界のバランスに似てるね！」



「永富君はするどいわね。生き物には子どもを生んで増える力があります。だから、この増える力以上にマグロを獲らないように、バランスをとる事が大事なの。継続して資源を利用するという意味で、持続的利用っていうのよ。ところで、マグロを獲っている時に、一緒に海亀、海鳥、それからサメの仲間が獲れてしまう事があるのを聞いた事があるかしら？」

「えーっ?!」みんな驚いています。「サバやイカを付けた釣針を何千本も海に流す、マグロはえ縄漁という漁法があります。実は海亀も、海鳥も、サメも、このマグロを釣るための餌を食べるから、釣針にかかってしまうのよ。」

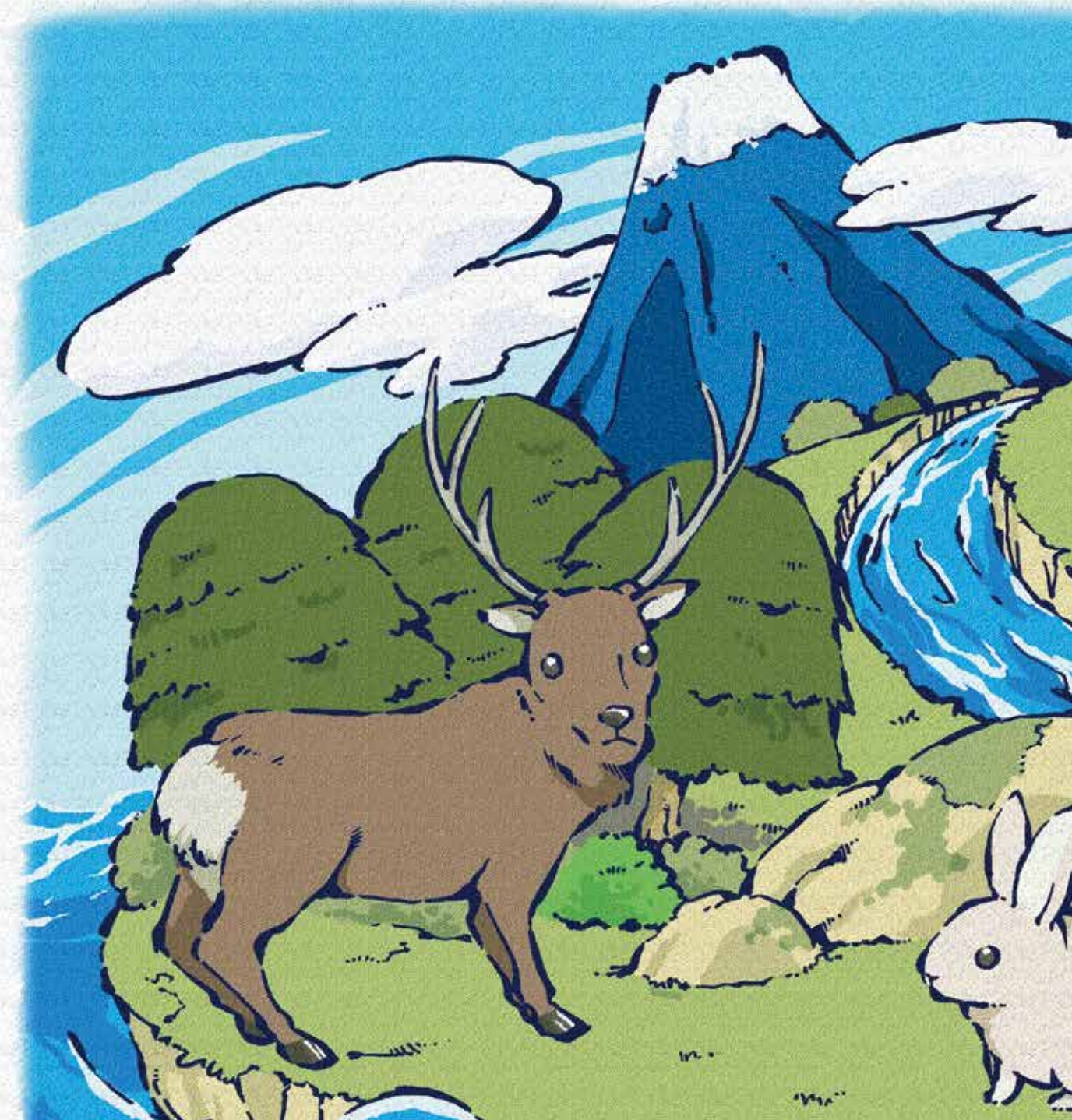




「なんだか信じられないけど、わからないでもないかなあ……。」奥田君は何か思いあたるようです。「漁師さんが釣ろうとしているわけではないのに、マグロに混ざって釣れてしまうので混獲といいます。」「そういえばテレビの特集で見た気がするわ。確か……、海鳥にはトリラインだったかしら……、それから、海亀は浅い水深でかかりやすいって説明していたと思います！」

「濱田さんは、とっても大事な事を覚えていたわね。マグロ以外の生き物が混獲されないように、漁師さん達も工夫しているのよ。」

「いろんな生き物がある……という事が大切なんだろうなあ。」土井君が難しい顔をして言いました。



「そう！良い所に気づいたわね。みんなは生物多様性という言葉を知ってるかな？」

「えーっと、地球にはいろんな生き物がいて、一種類の生物にも様々な個体がいるって事だったかしら。」竹本さんが思い出したようです。「その通り！いろいろな個性が集まって、いろいろな種類の生物になって、いろいろな種類の生物が、いろいろな生態系を構成しているのよ。この“いろいろな・・・”が大事なの。生物が多様だからこそ、私たち人間も生きていけるのよ。」



「それなら、生き物の多様性も大事にしなきゃ！」
永富君が叫びました。「ふふふ、もう生物多様性
条約っていう、みんなで生物の多様性を守ろう！
という国際条約があるのよ。」

「ふーん、人間も一生懸命考えてるんだ。」奥田君
が感心してます。「さて、今日は生き物を絶滅さ
せないように・・・、野生生物の大切さについ
て考えたけど、どんな感想を持ったかな？」

「うーん、人間のせいで少なくなった生き物の数を増やすのは、人間の責任・・・という事になるのかしら。」濱田さんが考えながら言いました。「そうね・・・、たぶん昔の人は生き物が無数にいたと思ったし、自然のバランスなんて気にしないで生活していたと思うの。でも最近になって、なんだか生き物は絶滅しちゃうぞ！なんとかしないと大変だ！という事に気づいたんじゃないかしら。」



「人間は野生生物と共存できるのかなあ……。」土井君が、つぶやくように言いました。「もちろん大丈夫よ！まだまだ、努力する事はたくさん有るけれど、ワシントン条約や生物多様性条約という方法を考え出したんだし……、その他にも様々な努力をしてきたからこそ、豊かな生き物と自然環境が、みんなに引きつがれたのよ。みんなも、受取った貴重な贈り物を君達の子孫に、ちゃんと受け渡すようにね！」

「はい！」生徒達の元気な声が教室内に響きました。



私達は自分達の生活を続けるために、どうしても野生動植物を利用しなくてはなりません。でも、好き勝手に利用していたら絶滅してしまう生き物も出てきます。私達には、この大切な地球を守り、祖先から受け継いだ生き物や豊かな自然を、未来へとつないでいく義務があります。どのようにすれば、私たちを含めた地球上の生き物みんなが生きていけるのでしょうか？この問題は、とても難しいのかもしれませんが。



でも、きっと解決できるはずですよ。私達は、地球の歴史の中では、とても新しい生き物です。古くから地球に住んでいる、たくさんの生き物から、この問題を解決するための知恵と勇気を受け継いだはずですから。さあ、外は晴れてきました。生徒達が校舎の中から、元気良く飛び出してきましたよ！





企画・原作

北村 徹

学術博士

長崎大学大学院修了。1967年7月生れ。

日本エヌ・ユー・エス (株)

画家プロフィール

林 亮吾

漫画家

福岡県出身。1982年11月生れ。

少年サンデーまんがカレッジ (02年9・10月期)

『BOAR』で新人賞努力賞受賞



大切にしよう、みんなの地球資源

一般社団法人 自然資源保全協会

この冊子は平成20年度独立行政法人環境再生保全機構
地球環境基金の助成を受けて制作されました。

